吉野川お散歩紀行

肥沃な土壌と豊かな水から生まれる野菜たち

石井町は、徳島市の西隣りに接し、東西に約６km、南北に5.5 km。町の北側に吉野川、中心には、支流の飯尾川が流れている。温暖な気候と豊かな水資源、吉野川がもたらした肥沃な土壌で野菜の栽培がさかんに行われており、ほうれんそうやブロッコリーなどの産地として知られている。

旧農大跡には、産学官が連携したアグリサイエンスゾーンができ、町を挙げて町の花である『藤』にちなんだ紫色や藤色の野菜を『いしいの藤やさい』として全国へ売り出そうとするなど、新しい動きが始まっている。その動きは、どのようなものなのか、石井町で農業に取り組む人々に話を聞いた。

※藤棚の写真提供　石井町役場産業経済課

産学官金連携で最先端トマトづくり
とくしまアグリサイエンスゾーン

「新しい取組みにいい意味でドキドキしています」と
Tファームいしい株式会社
代表取締役　菊地義和さん

徳島県立農林水産総合技術支援センターでは「新品種や技術の開発」、開発された「新品種や技術・新品目の普及」、将来の農業を担う「経営感覚に優れた人材の育成」など幅広い取組みを行っている。昨年４月には徳島大学に「全国初」の※６次産業化の人材を育成する学部として生物資源産業学部の農場が農業大学校跡地に設置された。そのような背景から、同センターと生物資源産業学部・石井キャンパスを中核とするアグリサイエンスゾーンが形成。今年の春から徳島県、徳島大学、民間企業である「タキイ種苗㈱」と「Tファームいしい㈱」が連携し「次世代型の高度環境制御によるトマト生産ハウス」が稼働。見学したTファームいしい㈱のトマトハウスでは、1ヘクタールもの広さがあり、温度も25度から28度に保たれている。チューブから一定量の養液が行き渡るなどICT（情報通信技術）を駆使しての生産だ。通常のトマトだと、６月から８月の収穫となるが、ここでは８月から翌年６月まで収穫ができる。今年の８月からは、県と大学、民間企業が連携し、美味しいトマトやリコピンなどの機能性成分を多く含むトマトの品種開発、数週間後の収穫量も予測できる収穫量予測システムなどの研究に着手する。全国にも誇れる最先端技術を駆使した施設が水の豊かな石井町で稼働している。アグリサイエンスゾーンの今後が楽しみだ。

※６次産業化とは・・・農林漁業者が加工・販売・サービス分野への進出により新たなビジネスに取り組むこと。

写真左は現在のTファームいしいのハウス。管理された中で美味しいトマトが生産され、出荷されている。主に関西圏に出荷されている。品種は「桃太郎トマト」。実が赤くなってから出荷できるのも魅力のひとつだ。

高さ５メートルのハウス。ここは８月から稼働する。「高収益生産モデル」や、「人材育成」「農業の省力化機械」にも取り組む。産学官金連携の施設だ。

徳島県立農林水産総合技術支援センター農業大学校 模擬会社「徳島農大そらそうじゃ」

農業大学校は、農業後継者や農村地域の指導者の養成、就農希望者や農業者等の研修を行うなど、農業の新しい担い手を養成する2年制の大学校だ。それぞれの学生たちが果樹、野菜、花き、畜産の分野で課題を決めて、演習、実習など実践的な取組みを行っている。農大生が作る稲作には吉野川の水である麻名用水が利用されている。

第1、第3日曜日に徳島市新町川水際公園にて開催されている「トモニSunSunマーケット」にて。写真左から志摩唯加さん、瀬川友樹さん、浅利俊輔さん、吉永要さん。手にしているのは瀬川さんが作った石井町藤やさいシリーズのキャベツだ。

農大ならではの特徴的な活動の一つが、模擬会社「徳島農大そらそうじゃ」だ。農大生全員が社員となり、商品企画や、販売方法等を検討し、大学校内の直売所「きのべ市」や学外の販売研修なども行っている。ジャム、阿波晩茶などの6次産業商品開発にも熱心に取り組んでいる。「自分たちの作った農作物が売れた時には、充実感や達成感がすごくあり、うれしいです」と話してくれた。販売活動の中でも水辺の心地良さを感じるのが「トモニSunSunマーケット」だ。「川を眺めながらおしゃれな空間で販売できるのは他にはない。夏場は涼しいし、魚がいるのを発見したりするのも楽しい」「休憩時間に水際公園を散歩して、改めて川辺の良さを知った」「開放的な雰囲気の中でお客様と交流できる」と教えてくれた。今後もより良い企画開発研究など、チャレンジが続いていく。

大学校内「きのべ市」の様子。常連客も数多くいる。POP広告も学生が作成。

心地よい風を受けながら店舗が並ぶ水際公園。
写真提供：徳島県農業大学校

農業が楽しいと思える人が増えてほしい

徳島農大そらそうじゃ代表取締役社長 藤本悠真（ゆうま）さん

「そらそうじゃ」代表として農大生全員をまとめる2年生の藤本さん。「野菜を育てること、結果が分かる農業は楽しい」と話す。入学して間もない1年生に、興味がある部署に所属してもらえるように、早い時期から企画し説明会をするなど心がけてきた。農大では学生それぞれが１つの果樹や野菜を選択して研究を２年間行う。藤本さんは、葉もおいしく生でも食べられるミニごぼうを選んだ。「石井町にある農大の敷地は水と土壌が豊かで、学生が作りたいものが何でも作れるので恵まれている」と感じている。

今後の目標は「そらそうじゃ」でみんながますます一致団結して、盛り上げていくこと、次の１年生に託していけるように活動していくことだ。多忙な中にも充実した日々が続く。

藤やさいを全国へ
「次世代育成・6次産業集積特区」の取組み

県内の市町村の地方創生への取組みを支援する徳島県版地方創生特区。石井町は、アグリサイエンスゾーンを中核とした6次産業化の推進、担い手育成、特産品の開発研究などを行う「次世代育成・6次産業集積特区」として、2018年5月に認定された。

どの地方にも同様の悩みがあるが、石井町も恵まれた土壌や気候があるにもかかわらず、農家の高齢化や担い手不足、耕作放棄地の増加などの現状があった。特区認定を受けたことで徳島県から規制緩和や、財政支援、国などとの調整等の支援を得られ、石井町としても農家の所得向上、6次産業化を目指し農業振興に取り組んでいる。

その取組みの中で今、力を入れているのが、『いしいの藤やさい』だ。石井町といえば、藤の花。『藤』をイメージさせる紫色や藤色の野菜をまちの新たな特産品にしようとチャレンジしている。

藤やさいの作付けに取り組む農家への支援や、有名料理研究家によるレシピ開発、魅力発信のためのパンフレットを作成し、東京や県内のイベントを中心に配布している。パンフレットで紹介しているポリフェノール成分の分析は、徳島大学生物資源産業学部に依頼し、産学官の連携も進んでいる。

「今は、農家さんにとっても、私たちにとっても、チャレンジの時期。まずは藤やさいを作っていただく農家さんを増やしていきたいですね」と語る石井町役場　上田陽子さん。

皆が一丸となっての挑戦はまだまだ続く。

石井町役場　産業経済課
農政係　係長上田陽子さん。
農家さんや各団体の調整役やイベント、広報、販路拡大等奮闘する日々が続く。
写真上は、『藤やさい』のパンフレット。

いしいの藤やさい

ほうれんそう

水菜

カリフラワー

※藤やさい写真、ふじっこちゃん画像については、石井町役場
産業経済課提供。

ここに暮らす

ここに生きる

morelaxe代表
JA名西郡ブロッコリー委員長
石井町農業後継者クラブ会長

久米　美智也さん

子どもに胸を張れる野菜作り、藤やさい生産にチャレンジ!

94歳になる祖父勝さんと。
東京で働いている頃から、徳島に帰ってくると、六条大橋近くから、のんびりと吉野川の流れを見ているのが好きだったという久米さん。それは、今も変わらない。

1人で1町(1ha)もの広い畑を耕していた祖父の跡を継いだ久米さん。2009年に働いていた東京から石井町へ戻ってきた。「最初は、ほんまに勉強で、爺ちゃんの手伝いから始めました。収入もなかった」という久米さん。野菜が安値の時には、祖父の納屋で仕事をしながら涙を流した夜もあったという。祖父から独立した当初は、ほうれんそうを主に作っていたが、2年程してブロッコリーを作り始めた。生産性もよく、当時、需要も伸びつつあった。そこに、農業の希望を見出し、ブロッコリーの畑を拡大していった。現在は、JA名西郡のブロッコリー委員長を務めている。会長である農業後継者クラブでも様々な活動を行う。耕作放棄地の手入れ、町民農園の管理、夏まつりの実行委員だってやる。主だったメンバーは、ほとんどが自分より年配者。若い人材が乏しい石井町の農業の課題を反映している。

そこで始まったのが、藤やさいの取組みだ。紫白菜などの作付けを経て、昨年から紫カリフラワーにチャレンジしている。就農の大きな課題のひとつが、収入の安定。その一助を担える品目に育ってくれればと久米さんは考えている。「参加している諸先輩方・石井町・JAと一緒に、まず3年は頑張りたい。みんなでやらないと大きな波はおきませんから」JAの若手達が販路を関東に開いてくれたので、藤やさいの品質とインパクトをきっかけに、他の石井町産の野菜も知ってもらえたらとも言う。

「自分の子どもに嘘をつきたくない」と言う久米さん。我が子に笑顔で食べてもらえることが自身の野菜作りの基本。そのために、薬剤散布の回数を減らせるよう、病害虫に強い野菜作りを心がける。「僕は、野菜の他に『あきさかり』という米も作っています。良い米作りには、良い水が欠かせない。僕らは土を作るのが仕事だけれど、水は作れない。我が子の食べる米が良い米に育つよう、吉野川の恵みを守っていただきたいですね」と話を結んでくれた。

未来を見つめて、土と、時には人と向かい合う日々が続く。